

	くらしま さちこ
氏 名	倉 島 幸 子
学 位	博 士 (医学)
学位記番号	新大院博(医)第167号
学位授与の日付	平成19年 3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	看護支援システムによる看護診断の有用性の検討
論文審査委員	主査 教授 赤 澤 宏 平 副査 教授 山 本 正 治 副査 教授 鈴 木 宏

#### 博士論文の要旨

【はじめに】看護支援システムは、看護師が画面上で看護診断名の定義や関連因子、診断指標を逐一照合しながら、看護診断を下すことができる。その結果、アセスメントの時間が短縮し、的確な看護診断を導くことで、看護ケアの均質化と効率化の実現が期待されている。しかしながら、実際には、看護支援システムが看護診断の有用性や正確性にどの程度寄与するかは明らかにされていない。そこで、本研究では典型的な看護事例を用い、看護支援システム使用群と非使用群の看護診断に対する評価試験をクロスオーバーデザインにより行った。両群の回答時間、正答率および正確度を比較し、看護支援システムによる看護診断の有用性を検討した。

【方法】大学病院に勤務し、本研究への参加に同意した看護師 42 名を被験者とし、看護診断の評価試験を行った。看護学の専門著書から 2 事例（内科系：51 歳男性、糖尿病；外科系：76 歳男性、胆嚢切除術後）を選び、各事例に対する看護診断の回答時間、正答率および正確度を評価した。研究デザインはクロスオーバーデザインを用い、被験者を看護支援システム使用群と非使用群に無作為に割り付けた。システム使用群は、看護支援システム MegaOak Nursing（NEC 社製）を用いた。看護支援システムを使用しない群は、看護診断記録用紙に記入することとした。診断名が正答であった場合は、Lunney の正確度スコアを用いて看護診断の正確度を評価した。統計解析にはソフトウェア SPSS14.0J を用い、有意水準 5%未満を有意差ありとした。

【結果】①回答時間を事例ごとに検討した結果、内科系事例では、看護支援システム使用群では 28.3 分であったのに対して、非使用群は 45.6 分であった。同様に、外科系事例ではシステム使用群 29.0 分、非使用群 36.3 分であった。いずれの事例でも、システム使用群は、非使用群よりも有意に回答時間が短かった。②回答時間の長短に影響を与える因子について重回帰分析を用いて探索した。その結果、システム使用の有無、被験者背景、使用事例、所属科のうち、システム使用の有無のみが有意な因子として選択された。③正答率は、内科系事例の場合、システム使用群が 47.6%、非使用群が 28.6%、外科系事例ではシステム使用群が 42.9%、非使用群が 52.4%であった。以上の 2 事例における正答率は、両群で統計学的な有意差はなかった。④正答者の正確度スコアは、内科系事例では、システム使用群は 4.6、非使用群は 4.0、外科系事例では、システム使用群は 4.3、非使用群は 3.5 であり、両群の正確度の分布に有意の差はなかった。

【考察】看護支援システムを使用することによって、看護診断の正確性を損なわずに診断に至るまでの時間を有意に短縮させることを明らかにした。看護診断に関わる時間を短縮して患者へのケアにかける時間に振り向けることができ、看護支援システム使用は有用であると考えた。

(論文審査の要旨)

看護支援システムは、看護師が画面上で、定義、関連因子、診断指標を照合しながら看護診断を下す病院情報システムのひとつであり、診断の正答率・正確度向上や診断までの時間の短縮に寄与すると考えられる。申請者は、内科系・外科系の2つの典型的事例を用いて、看護支援システムを使用した群(以下、使用群)と使用しなかった群(以下、非使用群)とで、回答時間、看護診断の正答率、正確度を比較した。

群間の背景要因を均等化すること、ならびに、診断順序の評価尺度への影響を除去するために、無作為化クロスオーバーデザインを適用した。被検者には、新潟大学医歯学総合病院に勤務する看護師42名を選び、看護支援システムはMegaOak Nursing (NEC)を用いた。

回答時間は内科系事例で非使用群 $45.6 \pm 13.9$ 分、使用群 $28.3 \pm 11.6$ 分、外科系事例では非使用群 $36.3 \pm 11.1$ 分から使用群 $29.0 \pm 15.6$ 分といずれの事例でも短縮した( $p < 0.05$ )。一方、正答率および正確度は、内科系・外科系のいずれの事例においても、両群で有意な差は認められなかった。

今回の結果から、看護支援システムが看護診断の正答率や正確度向上への寄与を明らかにすることはできなかったが、看護診断を下すまでの時間はいずれの事例においても有意に短縮し、看護業務に有用なシステムとなりうることが示唆された。

以上のことから本論文は、看護支援システムを使うことにより、看護診断の正答率と正確度は損なわずに診断時間を短縮できることを、確証的な研究デザインと統計学的な解析を用いて立証した点に、学位論文としての価値を認める。